

永山城跡

2011年

日田市教育委員会



永山城遠景（南から）

中央の木が生い茂った

丘陵が永山城跡。

手前の住宅地に永山布

政所が存在したといわ

れる。



永山城石垣（西から）

(上) 樹木伐採前 (下) 樹木伐採後

序 文

大分県日田市は、周囲を1,000m級の山々に囲まれた盆地を中心とする山岳地帯を市域としています。しかしながら、その盆地の真ん中を東西に貫流する九州第1の河川・筑後川の恵みによって、周囲から孤立した盆地でありながらも、古くから要衝の地として錚々たる歴史を紡いでまいりました。江戸期に直轄領として幕府から重要視された由縁も、この地形と立地によるところが大きいことでしょう。

今回報告します永山城は、江戸幕府が成立する直前の混迷した時期に、中央政権から派遣された代官小川忠岐守光氏によって築かれ、時を隔てずして永山布政所の設置とともに政の場としての機能を失った城といわれています。

現在は公園となって市民や観光客の憩いの場として利用されていますが、今般この公園内の遊歩道を整備することとなり、それに先立ち、この永山城を初めて発掘調査することとなりました。調査では永山城に直接関係する遺構は認められませんでしたが、近現代の永山城跡に関する資料を得ることができました。

この調査成果をまとめた本書が、文化財の保護や普及啓発、また地域の歴史を知る手がかりとして、今後大いにご活用いただければ幸いです。

最後に、調査にあたりご協力いただきました各関係機関・関係者の皆様、作業に御尽力いただきました作業員の皆様、そして発掘調査を温かく見守っていたいたい地元の皆様に、心より厚くお礼を申し上げます。

平成23年3月

日田市教育委員会

教育長 合原 多賀雄

例 言

1. 本書は、市土木建築部都市整備課が計画・実施した月限公園整備事業に先立ち、平成22年度に市教育委員会が実施した永山城跡の発掘調査報告書である。
2. 調査にあたっては、市土木建築部都市整備課および地元の方々に様々なご協力をいただいた。記して感謝申し上げます。
3. A区の遺構実測は調査担当者および森山敬一郎・財津真弓が行い、B区の遺構実測は株式会社埋蔵文化財サポートシステム大分支店に委託した。
4. 本書に掲載した遺構写真は、株式会社埋蔵文化財サポートシステム大分支店に委託した成果品を使用した。
5. 本書に掲載した遺物写真は調査担当者が撮影したものほか、雅企画有限会社に撮影を委託し、その成果品を使用した。
6. 調査現場での写真撮影は調査担当者が行った。
7. 卷頭写真図版1の写真是、平成15年度に国宝重要文化財等保存整備事業費補助事業（日田地区遺跡群）で撮影したものと、また写真18は平成19年度に発掘調査を行った慈眼山遺跡7次調査で撮影したものと使用した（撮影：九州航空株式会社）。
8. 採図中の方位は全て真北を示す。
9. 本書に掲載した地形測量図は、平成22年度に国宝重要文化財等保存整備事業費補助事業（市内遺跡）にて作成したものと使用した。
10. 出土遺物および図面・写真類は、日田市埋蔵文化財センターにて保管している。
11. 本書の執筆・編集は、行時が担当した。

目 次

I 調査に至る経過と組織	1
(1) 調査に至る経過	1
(2) 予備1次調査	2
(3) 予備2次調査	2
(4) 予備3次調査	3
(5) 要望と意見交換会	4
(6) 発掘調査の経過	6
(7) 調査組織	7
(8) 遺跡の名称について	7
II 遺跡の位置と環境	10
III 調査の内容	15
(1) 調査の概要	15
(2) A区	15
(3) B区	19
IVまとめ	22
(1) 今回の調査について	22
(2) 永山城のすがたと現況	22

挿図目次

第1図 周辺地形図 (1/5,000)	8
第2図 予備調査トレント位置図 (任意縮尺)	
	9
第3図 周辺遺跡分布図 (1/30,000)	12
第4図 A区遺構配置図 (1/200)	16
第5図 調査区位置図 (1/1,000)	17
第6図 B区および石段実測図 (1/150)	20
第7図 B区遺構実測図 (1/100)	21
第8図 永山城跡地形図 (任意縮尺)	24
第9図 永山城縄張想定図	25



日田市の位置

表目次

第1表 永山城関連年表 14

写真図版目次

卷頭写真図版1 永山城遠景 (南から)	
卷頭写真図版2 永山城石垣 (西から)	
(上) 樹木伐採前 (下) 樹木伐採後	
写真図版1 A区遺構および出土遺物	
写真図版2 B区遺構および出土遺物	

本文写真目次

写真1 水山城東側堀跡	写真23 星眼山 (三郎丸砲跡)
の公園	遠景 (南東から)
写真2・3 予備調査1次作業	写真24 三郎丸砲跡に残る曲輪
風景	写真25 重機作業風景
写真4・5 予備調査2次作業	写真26 作業風景
風景	写真27 調査区中央ベルト土層
写真6・7 予備調査3次作業	写真28 遺物出土状況
風景	写真29 作業風景
写真8 予備調査3次指導	写真30 「ヒカリツケ」加工
風景 (高瀬氏)	写真31 石垣施工状況
写真9~11 意見交換会の様子	写真32 石垣下の横穴墓の痕跡
写真12 現地見学会の様子	写真33・34 ①本丸
写真13 施工方法等協議風景	写真35・36 ②本丸虎口南側石垣
(高瀬氏)	写真37・38 ③本丸虎口北側石垣
写真14 自然保護団体との樹	写真39・40 ④本丸北側石垣
木伐採協議風景	写真41・42 ⑤本丸北側の曲輪
写真15・16 発掘調査指導委員	写真43・44 ⑥本丸西側の曲輪
会の様子	写真45・46 ⑦堀曲輪
写真17 慈眼山と永興寺	写真47・48 ⑧堀の石垣
写真18 慈眼山と慈眼山遺跡	写真49・50 ⑨土塁
7次調査地(南から)	写真51・52 ⑩堀
写真19 日隈城跡遠景 (南から)	写真53・54 ⑪堅堀
写真20 日隈城虎口石垣	写真55・56 ⑫南側堀曲輪
写真21 日隈城跡に残る石垣	
写真22 日隈城本丸に残る石垣	

I 調査に至る経過と組織

(1) 調査に至る経過

永山城跡は、日田盆地中央やや北寄りに存在する比高約30mの独立丘陵・通称月隈山にある遺跡である。この月隈山は現在全体が「月隈公園」と呼ばれる都市公園として指定されており、山の南～東面には児童プールや遊具施設などが整備され、市民の憩いの場となっている。一方、山の北～西面はアラカシやイチイガシなどの樹木が生い茂り、これを中心としてやはり丘陵全体が「日田市環境保全条例第23条」に基づく市の保存樹林に指定されているところもある。また、近世に永山城（月隈城・丸山城）が築かれたことから、「城山」として市民に親しまれ、地元自治会・子ども会や隣接する大分県立日田林工高等学校の生徒などの手によって広場等の清掃活動も行われるなど、市民生活に密着し、なおかつ堀を埋め立てた広い駐車場を備えていることから、豆田町観光の起点としても大きな役割を担う公園である。



写真1 永山城東側堀跡の公園

この月隈公園内には道路としては遊歩道しかなく、車両が通行することができないため、平成3年の台風などにより発生した風倒木は、搬出する手立てもなく放置されてきた。これらの処理のため、平成12年ごろから、公園内に車両乗り入れ可能な道がほしいとの地元要望が出ていたようである。

平成19年夏、文化財保護課から市各課に次年度実施予定の公共事業について照会した際、都市整備課において、次年度事業として月隈公園の管理道整備（自動車の通行が可能な道路の整備）が計画されていることを把握した。この管理道整備のほかトイレ整備などを含む「月隈公園整備事業」は採択されたため、平成20年度より両課で現地会議や協議を重ねた。道路建設が予定される月隈山西面は現状で草木が繁茂し地表面の状況の把握は困難であったが、埋蔵文化財包蔵地（遺跡番号204110 月隈城跡（丸山城・永山城）・204111 月隈横穴群）内にあたるため、丘陵を掘削するのであれば発掘調査が必要となる可能性が非常に高いことから、地山掘削を最小限にできるルート・工法の検討を依頼した。しかし平成20年12月に提案されたルート（第1回ルートA）に基づく現地確認の結果、盛土工法を基本としても、膨大な盛土により現地形が大幅に変更されてしまうことから、掘削を伴わなくとも文化財調査は必要であろうということになった。なお都市整備課は文化財保護課との協議を進めながら、同時に地元や自然保护団体、市の環境審議会などとも協議を重ねており、自然保护団体や環境審議会は「都市部の貴重な自然が損なわれる」とのことから工事計画を良しとしなかったが、平成21年2月、大木の伐採を避けることを条件に環境審議会の了承を得たことを受けて、工事予定地を対象に埋蔵文化財の予備調査を実施することとした。ルートAの予備調査は予算の都合上、2ヶ年度（平成21年3月、平成21年5月）に分けて実施し、またその後工法変更を想定したルートBの予備調査は平成21年7～8月に実施した。



写真2 予備1次調査作業風景

(2) 予備1次調査

月隈山の西側から急斜面をつくるルートAを対象として、平成21年3月2日～同3月11日の間予備調査を実施した。

路線内を中心にトレンチを10本（第2図の青1～7トレンチ、青A～Cトレンチ）設定し、重機または人力で掘下げたところ、まず青Cトレンチの石垣は城を取り囲む堀の石垣と考えられ、堀に囲まれた内側にある青A・Bトレンチの整地層は城の施設として造成された曲輪のひとつであることがわかった。また、青2・4・6・7トレンチもそれぞれ曲輪として整備された平場であることが認められ、特に青6トレンチでは整地後に何かの構造物が存在した可能性が想定される。

また特筆すべき事項としては、青1・5トレンチにおいて認められた石垣が、その構築方法や現存する南側の石垣の軸との同一性からこれらは対をなすものと考えられ、城門が設けられていた可能性があることなど、調査箇所全体およびその周辺にわたって城郭としての痕跡が良好に残されていることが明らかとなつた。

以上の調査結果により、道路計画の取扱いについては今後さらに協議を継続していくこととなった。なお今回の調査では時間・予算の問題から道路予定地の全てを対象とすることはできず、特に青6・7トレンチ付近では十分な遺構の確認ができなかったため、残りの部分については次年度改めて予備調査を行うこととした。

(3) 予備2次調査

年度が替わり、改めて前回の予備調査結果と今後の事業予定について文化財保護課と都市整備課とで協議を行い、ルートAのうち前回調査が及ばなかった区間を対象に、平成21年5月14日～同5月29日の間予備調査を実施した。

路線内を中心にトレンチを11本（第2図の青8～9トレンチ、青D～Lトレンチ）設定し、重機または人力で掘下げたところ、まず、青D～G・I～Kトレンチを設定した平場では前回の予備調査と同様に城の曲輪として整地された痕跡が認められ、さらに青Jトレンチに見られるような土壘によって囲まれている可能性が高いことがわかった。加えて青Hトレンチでは人工的に地山を削ってつくられた複数の小さな平場の段が認められ、この場所は前回の予備調査における青4トレンチの直下にあたり、その周辺で石垣が確認されていること併せて考えると、堀曲輪と青4トレンチの曲輪との連絡通路である可能性も想定された。また青8・9トレンチでは厚さ2.4m以上もの整地層や、それに掘りこまれた土坑・溝・ピットなどが検出されており、前回の予備調査と同様に大規模な整地後に何かの建物が建てられた痕跡と考えられた。



写真3 予備1次調査作業風景



写真4 予備2次調査作業風景



写真5 予備2次調査作業風景

さらにこの青4トレンチの曲輪の直下にあたる青1～Kトレンチ付近では人頭大の川原石の転石が多く見られることから、本来は青8・9トレンチの曲輪にも石垣が存在した可能性があることがわかった。

以上のように、今回の調査でも道路予定地のほぼ全面にわたって城の遺構が色濃く残されていることから、盛土工法を採用したとしても良好な遺跡を土圧で破壊する可能性が高いため、工事前に発掘調査が必要であると都市整備課に回答した。また調査後には、考古学や城郭の専門家より、城としての評価について、「城の築造から発展までの歴史がよく保存されており、今後のまちづくりの核となりえる貴重な遺跡である」との意見をいただいた。

(4) 予備3次調査

予備1次・2次調査の調査結果および専門家の意見と工事予定について都市整備課と協議を行い、ルートAでは文化財を破壊して遺跡の価値を大きく損なうこととなるため、文化財により影響の少ないルートに変更することとした。検討の結果、月隈山の南側、広場からスロープを新設して現在の遊歩道を車両1台が通行できるような道路（第1回ルートB・非常時・管理時のみ。通常は通行止め）に改変する案が浮上し、具体的な設計図はないものの、この案を想定した予備調査を実施することとなった。

この予備調査は平成21年7月22日～同8月7日の間行った。想定される工事範囲を中心に27本のトレンチ（第2回の赤1～27トレンチ）を設定し、人力によって掘下げを行った。今回の対象地は後述する本調査と関連が深いため、各トレンチの調査内容および所見を詳しく記載する。

- ・ 広場からのスロープ新設部分となる1・2トレンチでは整地層のほか、曲輪として整地する際に岩盤を削平した痕跡が認められた。（→後に本調査で、曲輪としての整地ではなく近現代の所作である可能性が高いことが判明）
- ・ スロープから遊歩道に上りついた地点にあたる3～5トレンチとその付近では古い痕跡は見つからず、近年の造成によって形成されたものであることがわかった。
- ・ 5トレンチの先にある鳥居（文化3年／1806年銘あり）の礎石の上に石疊が乗っていることから、この鳥居付近から7トレンチまで存在する石疊は少なくとも明治以降のものである可能性が高い。
- ・ 横穴の入口前にあたる6トレンチでは、参道建設時に大きく破壊を受けた古墳時代の横穴墓の前庭部・墓道の残りと思われる遺構が確認され、石疊の下にこれらの遺構が残存している可能性が高い。また、山肌に開口した穴で、特殊地下壕に混在する浅い穴が本来の横穴墓の残骸であることがわかった。
- ・ 7・8・12トレンチは参道に埋まりわずかに開口部が見える横穴墓の前にあたり、横穴墓に関する遺構が残存している可能性が高い。
- ・ 7・8・12トレンチの南側斜面にはわずかに段が形成されており、この段にも横穴墓が複数存在している。ただし、これらの横穴墓の天井からトレンチ前の参道までは土被りが十分に確保されているようで、通行に支障はないと思われる。
- ・ 9トレンチ西側には石垣が残存しており、9トレンチ付近では積み直されている。
- ・ 10トレンチの現地表下15cmではピットが検出された。江戸期の遺構と考えられ、城に伴うものである可能性が高い。



写真6 予備3次調査作業風景

- ・13～18トレンチの区間は近年の盛土と削平により道を広げられており、少なくとも明治期以降と考えられ、城に伴うものではないと思われる。
- ・本丸石垣前にある19・20トレンチ付近には石垣があり、城の当時のものである可能性がある。
- ・22～25トレンチの石豈の区間では、石豈の下に横穴墓や城の遺構が残存している可能性がある。
- ・26・27トレンチでは時期不明の石豈や階段状遺構が見られ、少なくとも江戸期には7トレンチ付近の抉れた部分を通行していた可能性が考えられる。11トレンチ付近では川原石落し積みの石垣が見られ、このあたりの参道は江戸末期以降に岩盤を削平して形成したものと思われる。

以上のように、現遊歩道側でも城の痕跡や古墳時代の横穴墓の痕跡が点在していることがわかったため、こちらのルートに道路をつくるとしても、やはり工事前に発掘調査が必要である旨を都市整備課に報告するとともに、遺跡に対する影響が最小限となるような工法を検討することを依頼した。

(5)要望と意見交換会

管理道整備については、主管課である都市整備課が地元だけでなく自然愛護団体や市の環境審議会などとも協議を行ってきていたことは前述のとおりであるが、予備2次調査と前後する平成21年5月7日、日田考古学

同好会・小追辻原遺跡研究会・天領日田を見直す会の連名で、管理道建設の中止・永山城址の本格的な文化財調査や成果の公開と文化財指定を求める要望書が、市教育委員会教育長に対して提出された。

また、同5月29日には自然保護の7団体と環境活動の4団体、文化財愛護の2団体を合わせた「日田三丘（日隈、月隈、星隈）の森と史跡を守る会」より、上記要望に三丘の管理規定の明文化を加えた要望書が、同様に教育長에게提出された。

さらに同6月8日には、日田三丘の森と史跡を守る会（以下、守る会）より、管理道建設について23項目にわたる質問と10項目以上のぼる提言を含む公開質問状が、日田市長あてに提出された。

これらに対し、市としては「都市公園としての機能を充実させつつ市民共有の貴重な文化財として保存と活用を図る」旨の回答を行った。

公園管理や来訪者の利便性と貴重な地域資源の活用を図るために園内の整備を望む声と、月隈山を含む三丘にある自然と文化財を手付かずのまま守りたい声が対立する構図となり、事業をこのまま進めることができなくなった。このような状況を打開するため、自然保護や文化財保護だけでなく、観光面、地元の声など、あらゆる角度から月隈山の価値を確認し、今後の保存・活用を市民全体で考える、意見交換会を開催した。



写真7 予備3次調査作業風景



写真8 予備3次調査指導風景 (高崎氏)

「みんなで考えよう！日田豆田のシンボル月隈山」調査報告と意見交換会（主催：日田市教育委員会）

日時／平成21年10月4日（日）13：30開会

場所／日田市中央公民館ホール

参加人数／90名

内容／・「月隈公園の概要について」（市都市整備課）

・「月隈山の歴史と試掘調査結果」（市教委文化財保護課）

・意見発表「月隈山の自然環境について」（日田三丘の森と史跡を守る会会长）

「考古学的・文化的価値について」（日田考古学同好会会长）

「地域資源としての活用について」（日田市観光协会会长）

「地域の取組みについて」（豆田地区振興協議会会长）

・現地説明会（市教委文化財保護課）

意見発表および質疑応答では、月隈山の取扱いについてそれぞれの立場からさまざまな意見が述べられたが、月隈山の北西側から新たに道路（ルートA）をつくるべきではない、ということで大方の考えは一致し、今回の意見を参考に今後は必要な公園整備・管理・保存の対策を、都市整備課と文化財保護課の協力のもと練っていくこととした。



写真9 意見交換会の様子



写真10 意見交換会の様子



写真11 意見交換会の様子



写真12 現地見学会の様子

(6) 発掘調査の経過

これまでの各種団体等との協議や意見交換会での意見等を踏まえ、月限山の北西側からの道路建設（ルートA）は中止とし、平成21年12月頃から南側の遊歩道を車道に改変する（ルートB）方向で事業を進めることになった。予備3次調査で南側にも多くの遺構が存在することが判明したため、工事にあたっては遺跡への影響が最小限となるような工法をとることを条件に付したが、それでも大規模な盛土となるスロープ部分（A区）については発掘調査を行う必要が生じたため、平成22年5月から着手した。

調査に際し公園を一部封鎖することとなるため地元説明会を行い、5月18日から調査を開始した。終盤にかかった6月下旬、日田三丘の森と史跡を守る会より市に対して、「事前に説明も無く月限公園に道路をつくろうとしている」との批判があり、それに対して市は守る会への事業説明会を開催するも守る会の納得を得られなかった。このままでは調査はともかく、事業を計画どおり進めることができないため、この事態の整理に向け、市教委は考古学・城郭・植物・土木工学の専門家からなる月限城跡・月限横穴群発掘調査指導委員会を8月12日に開催した。委員会では「月限山に車道を作るべきではない。城跡らしい現況の石垣のイメージを残すべき」との意見を受け、これに基づいて市は工事計画を一度白紙に戻し、現在の遊歩道（石疊）の雰囲気を活かした改修を行う方針に変更決定するとともに、工法や施工の細部にわたって考古学・城郭の専門家の指導を頂きながら事業を進めることとした。加えて、来年度以降、月限山を本格的に調査していくこととした。

上記方針に基づく新たな工事計画では、現況では歩きにくい木丸石垣下の石段の整備および既存の遊歩道の石疊を歩き易いものに改修することとなった。石段部分については段を増やすため現況から地形が若干変わること、また城が機能していた当時の本来の城道が石段・石疊の下に存在する可能性があることから発掘調査の対象とし、石疊等の施工については工事立会とした。



写真13 施工方法等協議風景（高瀬氏）



写真14 自然保護団体との樹木伐採協議風景



写真15 発掘調査指導委員会の様子



写真16 発掘調査指導委員会の様子

石段の発掘調査（B 区）は11月9日より開始した。これに先立ち、現況の石段・石壇の一部について実測による記録保存を行った。車両等が登れる道路がないため、すべて人力で作業を行わざるを得なかつたが、天候にも恵まれ、調査は12月10日に終了した。調査終了時期と前後して工事が始まり、工事の要所要所で立会調査を行つた。石壇の一部では、現在の石を撤去した段階で、予備3次調査で検出されたような横穴墓の痕跡も見られたが、工事では現況以上の掘削が発生しないことから、写真撮影とメモ記録をとることで対処した。

なお、城の遺構や眺望に影響のある樹木の伐採については、今後も自然保護団体と協議していくことになった。

（7）平成22年度調査組織

調査主体　日田市教育委員会

調査責任者　合原多賀雄（日田市教育委員会教育長）

調査統括　財津隆之（日田市教育庁文化財保護課長）

調査事務　土居和幸（同埋蔵文化財係長）、中嶋美穂（同副主幹）、塚原美保（同主査）

調査担当　行時桂子（同主査）本調査・予備2次調査、渡邊隆行（同主任）予備1次・3次調査

調査員　今田秀樹（同主査）、若杉竜太（同主査）、矢羽田幸宏（同主査）

発掘作業員　江藤キミ子、河津定雄、後藤美知夫、財津真弓、高村三郎、筒井英治、原田　強、平原知義、森山敬一郎

整理作業員　黒木千鶴子、佐藤久美

月隈城跡・月隈横穴群発掘調査指導委員会

小田　毅（別府大学講師）、後藤宗俊（別府大学名誉教授）、佐藤仁蔵（日田市文化財保護審議会／

日田市立博物館協議会）、田中孝典（大分工業高等専門学校准教授）、豊田寛三（別府大学学長）、

後藤晃一（大分県文化課）

オブザーバー：高瀬哲郎（石垣技術研究機構代表）、上野淳也（別府大学助教）

調査指導　上野淳也、高瀬哲郎

来訪者　岩下克之、原田勝宏（日田考古学同好会）、江面嗣人（岡山理科大学教授）、

古田京太郎（日田三丘の森と史跡を守る会）、三村衛（京都大学准教授）

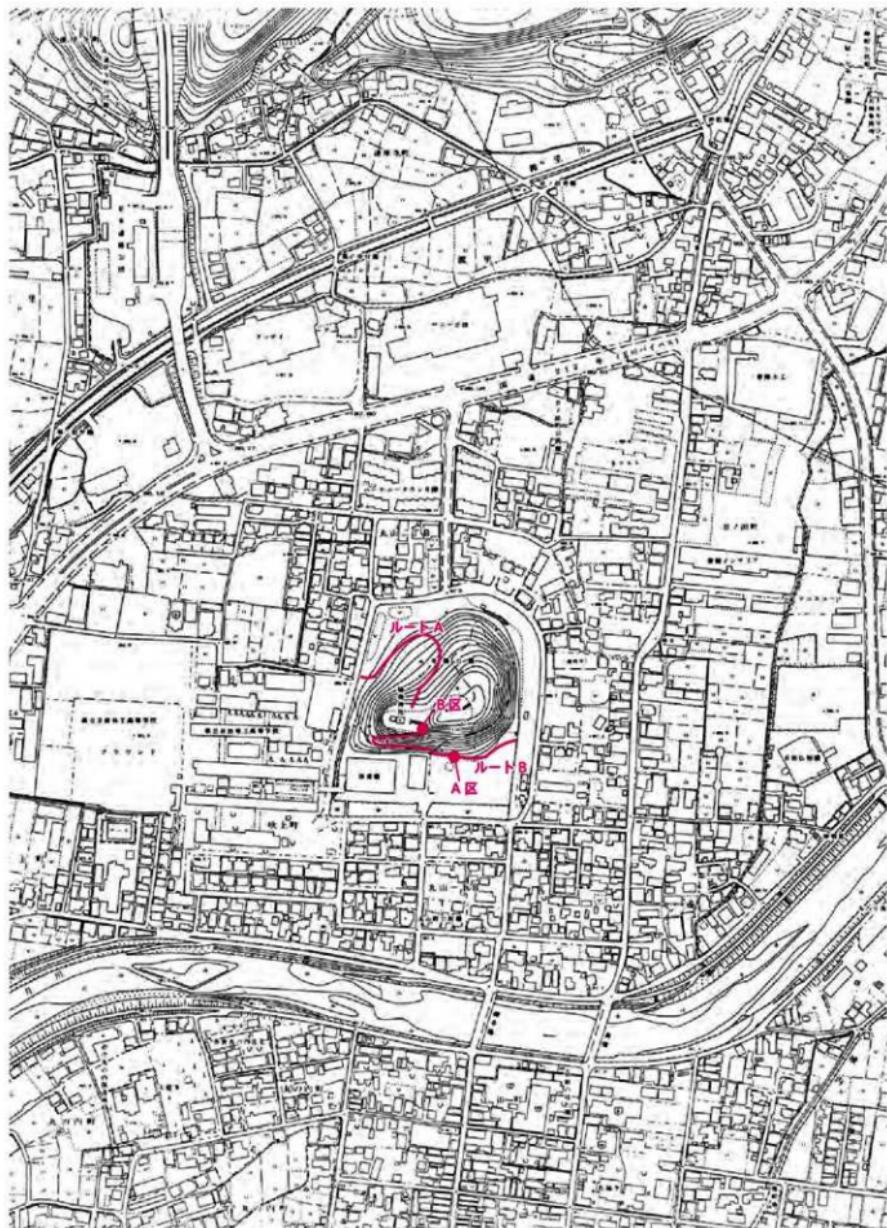
※予備調査において、後藤宗俊・上野淳也、高瀬哲郎の各氏のほか、下村智（別府大学教授）、佐藤裕二

（玖珠町教育委員会）、高崎章子（中津市教育委員会）、後藤晃一の各氏の来訪、指導をいただいた。

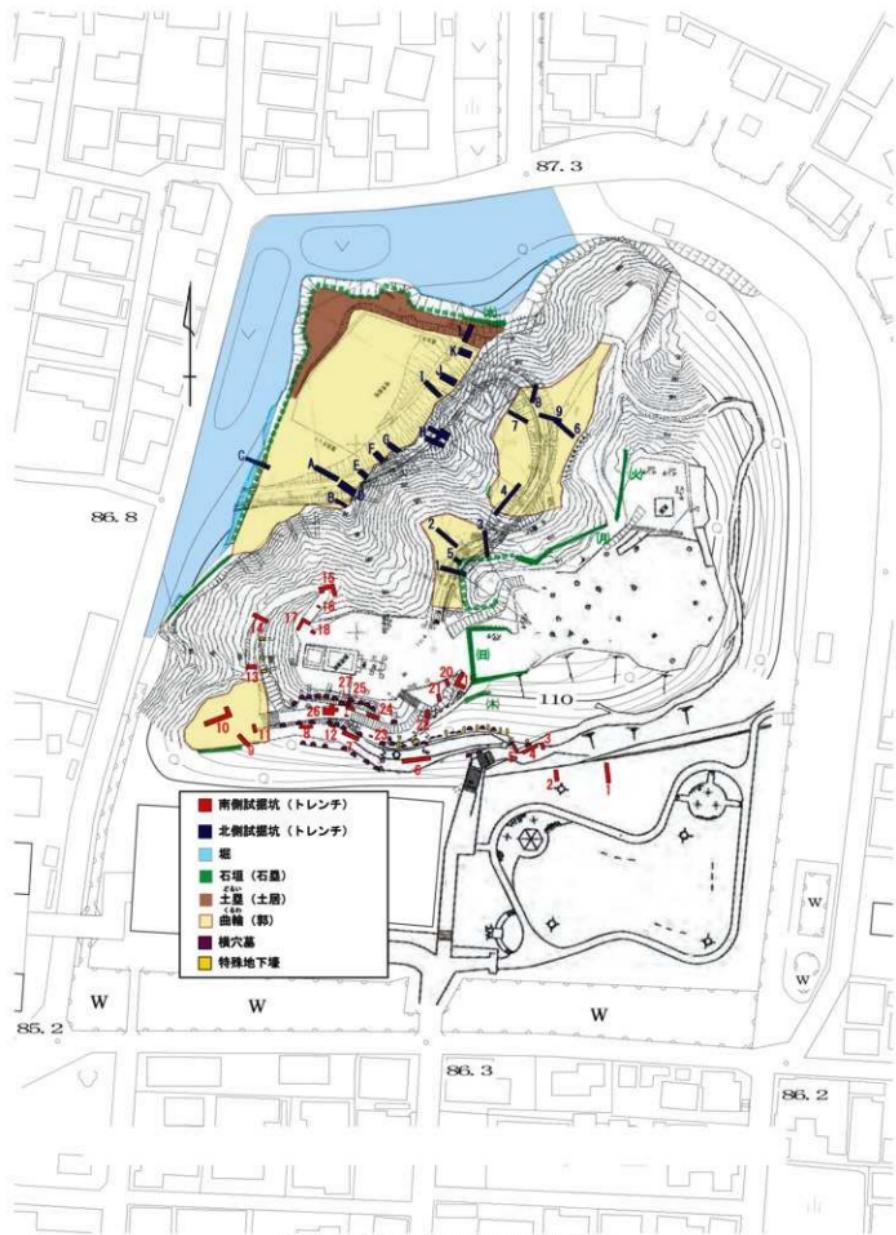
（8）遺跡の名称について

月隈山に存在する周知遺跡名は、「大分県遺跡地図」（2008 大分県教育委員会）によると「遺跡番号204110月隈城跡（丸山城・永山城）」および「遺跡番号204111 月隈横穴群」となっている。現在地元住民などは「月隈山」「月隈丘陵」などと呼称するが、「月隈城」とは呼ばない。この月隈山の歴史については本書14頁の第1表を参照いただきたいが、1601（慶長6）年に豊臣秀吉の命を受けた小川忠政守光氏がその居城として構えた城は「丸山城」と呼ばれ、その後1616（元和2）年に日田藩主（徳川大名領）として入部した石川主殿守忠総により「永山城」と改称されている⁽²¹⁾。本書以降は歴史上の名称に倣い、遺跡番号204110の周知遺跡名を「永山城（丸山城）跡」に変更する予定である（遺跡番号204111については変更なし）。

（註）『日田郡史』『豊後日田永山市政史料』などによる。



第1図 周辺地形図 (1/5,000)



第2図 予備調査トレンチ位置図（任意縮尺）

II 遺跡の位置と環境

永山城跡の位置

永山城跡⁽¹⁾は、日田市丸山2丁目に所在する。日田市は大分県の西部に位置し、四方を山に囲まれた人口約72,000人の小都市である。日田市からは久留米・福岡・北九州へ中津宇佐・湯布院へ別府大分・阿蘇へ熊本へと各方面に交通網が張り巡らされている。これら各ルートは天領として日田が栄えた江戸時代に幕府が設置した、西国筋郡代（代官所）を中心に筑後国高良山路・久留米城路・筑前国大宰府路・福岡城路・彦山路・小倉城路・豊前国宇佐宮路・中津城路・玖珠都森宮路・直入都岡城路・肥後国阿蘇山路・限府路・熊本城路と呼ばれる旧国的主要な地域と日田を結ぶ道筋でもあり、内陸部の山間地にあって交通の要衝としての役割を果たしていた。

永山城跡を地形的に見ると、日田盆地北東部、花月川北岸沖積地にある独立丘陵、通称「月隈丘陵・月隈山」に位置する。この独立丘陵は阿蘇溶結凝灰岩からなり、新生代第4期洪積世後期の阿蘇4火砕流が盆地に流れ込んで盆地北方からの河川浸食により周囲に広がる台地や慈眼山などから切り離された、標高118m、周囲との比高約30mを測る残丘である。周囲の平地には住宅地が広がり、現在は丘陵全体が公園として利用されている。

周辺の遺跡（第3図）

永山城跡を取り巻く主な遺跡について、時代ごとに概観する。

日田盆地では旧石器～縄文時代の遺物が出土する遺跡はあるものの、遺構が良好に残る遺跡はほとんど見られない。しかしその弥生時代になると、盆地内での遺跡数が激増する。永山城跡の西の台地上には、「磨製石器の宝庫」と呼ばれ、弥生時代の大集落のほか、北部九州の影響を強く受けた特定集団墓と考えられる豪華な副葬品を伴った覆棺墓が見つかった吹上遺跡⁽⁴⁾がある。三隈川（筑後川）とその支流庄手川に挟まれた微高地には環濠集落や方形周溝墓などの墳墓群が見つかった徳瀬遺跡⁽⁵⁾がある。弥生時代の良好な遺跡は三隈川北岸のみならず、児用覆棺墓や石蓋土坑墓などの墳墓群が見つかった上野第2遺跡⁽¹⁹⁾など、南岸にも分布している。

古墳時代初頭になると、吹上遺跡の北東の台地上で豪族居館と考えられる方形環濠建物が出現した小追辻原遺跡⁽²⁾がある。小追辻原遺跡の東そばには、弥生時代後期～古墳時代初頭の覆棺墓や石棺墓などが数多く見つかった草場第2遺跡⁽³⁾がある。また古墳時代には数多くの古墳が盆地内にもつくられたが、なかにはガランドヤ古墳群⁽¹⁷⁾・穴觀音古墳⁽¹⁸⁾・法恩寺山古墳群⁽⁹⁾など、筑肥の影響を受けた装飾古墳も存在する。

古代の遺跡は盆地から派生する谷などで集落が数多く見つかっているが、盆地内では調査例が少なく、様相もそれほど明らかでない。そのような中で、近年調査が行われた大波羅遺跡⁽⁸⁾では一辺約1m～長方形を呈する大型の柱穴が列をなして見つかり、遺物には転用鏡もみられることから、8世紀中～後半の官衙的要素の濃い遺跡と考えられる。またコ字状に6棟の掘立柱建物が並び、「大領」銘の墨書き土器が出土した小追辻原遺跡も、8世紀後半～9世紀前半の郡衙の可能性が指摘されている。さらに三隈川南岸の台地上には8世紀前半～中頃の掘立柱建物群などとともに「豊馬豊馬」と刻書された石製権が出土した上野第1遺跡⁽²⁰⁾があり、『豊後國風土記』に記された「石井駅」に想定されている。

中世の遺跡は盆地東部で多く見られる。まず永山城跡の東約700mにある標高約130mの慈眼山には、中世の日田を治めた大蔵氏の居城といわれる大蔵古城跡⁽⁶⁾がある。山中では現在でも大規模な曲輪群や土塁・堀切を見ることができる。慈眼山麓に広がる慈眼山遺跡⁽⁷⁾では中世の堀や15～16世紀の掘立柱建物群・井戸・水路・整地層などが広い範囲で確認されており、計画的につくられた大規模な集落、しかも瓦や渡来鏡・刀装具などが出土していることから、武家屋敷の可能性が考えられる。慈眼山の丘陵西端にある平安時代末期の大蔵氏建立と伝えられる慈眼山永興寺⁽⁵⁾には木造十一面觀音立像など国指定重要文化財の仏像群が安置されており、麓に広がる武家屋敷群の状況などからも、中世日田（大蔵氏・大友氏）氏が栄華を誇っていたことがうかがえる。

しかし中世日田氏も1547（天文16）年に断絶し、豊後国守護大友氏により選抜された8人の郡老による支配体制に置かれる。その後大友氏の豊後除国に伴い太閤蔵入地となり、近世日田社会への道筋が始まる。

盆地内に残る近世の主な遺跡としては、まず今回調査をおこなった永山城跡のほか、島原の乱後に幕府の支配強化策として城の南側に設置されたといわれる代官所・永山布政所跡⁽²¹⁾がある。これまで数回予備調査が実施されており、江戸期の溝や茶碗類・木製品を多量に含む廃棄土坑などが検出されている。布政所そのものを検出したものではないが、これらは布政所に関連する施設と想定されている。なお日田の代官は1767（明和4）年に全国4郡代のひとつ「西国筋郡代」に昇格したこと、日田は幕府の西国支配の最重要拠点となっていく。このような政治背景のもと、永山城・永山布政所の南側には城下町豆田町が発展し、「日田金」と呼ばれる金融資本を成立させた代官所御用達の商家の建物などが、現在も「日田市豆田町伝統的建造物群保存地区」⁽²²⁾として残されている。さらにこの豊かな経済が町人を中心とした独特的天領文化を育み、門下生総数約4,800人を数え日本最大といわれた広瀬淡窓の私塾・成宜園が成立する。1817（文化14）年に開かれた成宜園は、「史跡成宜園跡」⁽²³⁾として昭和7年に国の指定を受け、現在園内には淡窓の居宅「秋風庵」と書齋「遠思樓」が往時を偲ぶものとして残されている。塾として機能していた当時にはそのほかにも数棟の建物が建っていたことが、絵図および発掘調査で判明している。

日田三丘（月隈山・日隈山・星隈山）

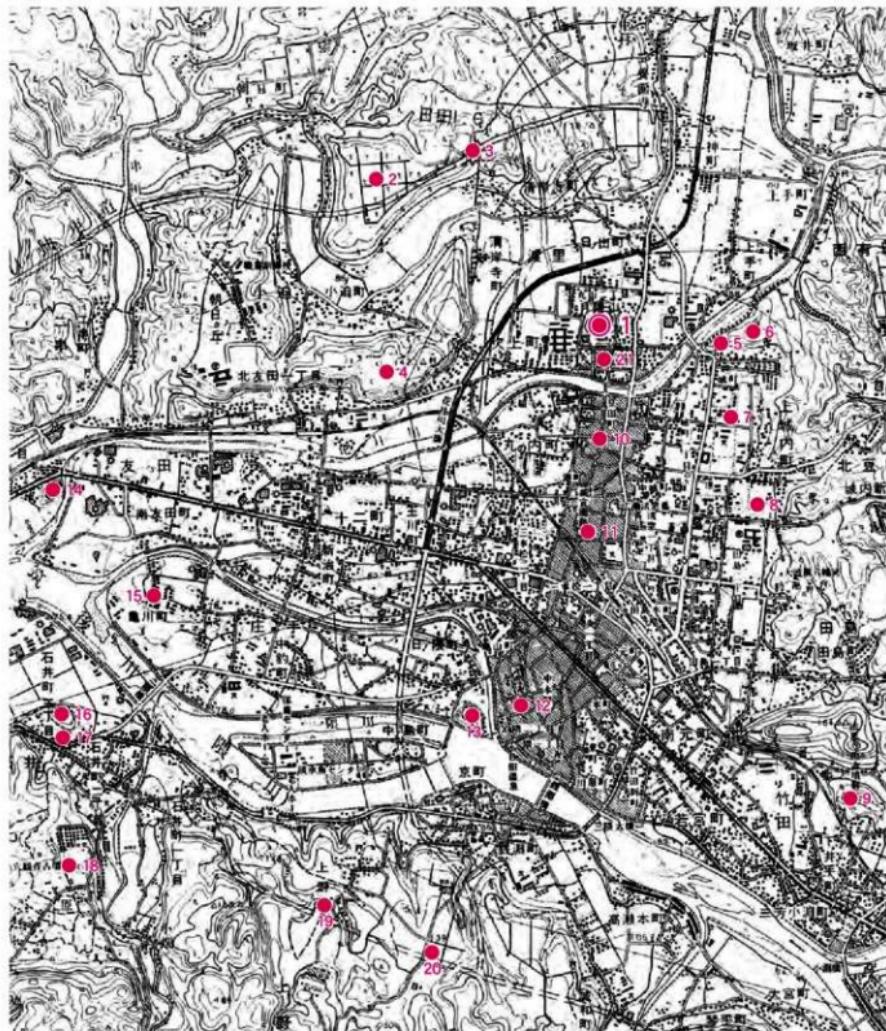
日田盆地の周辺を取り囲む丘陵には、大蔵古城をはじめ中世期に数多くの山城が築かれているが、盆地内に点在する独立丘陵も視覚的に目立つ存在であることから、古くから人々に大いに利用されてきた。永山城跡が日田盆地内に残る阿蘇溶結凝灰岩の水食残丘に存在することは前述のとおりであるが、これを含めて盆地内には3つの水食残丘が存在しており、それぞれに城跡などの遺跡が存在している。

【月隈山】本報告にかかる永山城跡が存在する残丘である。城跡のほかにも、繩文土器や弥生土器などが採集されたり、山腹崖面には古墳時代後期の横穴墓が多数造営されている。しかしそれから約1,000年後に丸山城（永山城の前名）が築かれるまでの間は記録に残っておらず、古代・中世の状況は明らかでない⁽²⁴⁾。1601（慶長6）年に小川老岐守光氏によって城が作られた当時は「丸山城」といい、その後に入部した石川主殿頼忠により「永山城」と改められ、同時に城下町・丸山町も「豆田町」と改められ、その後の日田の繁栄を築く礎となったが、山の南に永山布政所が1639（寛永16）年に設置された後は、数度の手入れは行われているものの基本的には廢城として扱われている。明治維新後は現在広場となっている部分が日田県庁・日田県知事官舎や法務局として利用された。また、第2次大戦中に避難場所としてつくられた特殊地下壕（防空壕）が山腹崖面に多数開口している。

【日隈山】月隈山から約2km南の三隈川河畔にある筑紫溶岩の残丘で、現在は亀山公園として市民に親しまれている。既に消滅しているが、この丘陵の頂部には日隈古墳があったとされ、江戸時代に老木の根元から出土したとされる細縞式獸帶鏡（県指定有形文化財）が、現在頂部に鎮座する日隈神社に伝えられている。また中世末には、豊臣秀吉の代官として入部した宮木長次郎によって、1594（文禄3）年に外掛形の石垣の虎口や三段に造成された曲輪を備えた日隈城⁽²⁵⁾が築かれており、城の東側には城下町（隅の町並み）⁽²⁶⁾が整備された。

【星隈山】月隈山から約3km南東、花月川と三隈川の合流点付近にある、月隈山と同様の阿蘇溶結凝灰岩の残丘で、現在は星隈公園となっている。山腹崖面には横穴墓群が40基以上確認されている。この丘陵は、丸山城を築城した小川老岐守光氏が、丸山城完成までの3年間に「友田村丸山」に構えた仮城（三郎丸砦跡⁽²⁷⁾）とされ、丸山城完成後に友田村の民を城下に移し、丸山町と名づけたといわれる。現在は城の遺構として、段々に造成された曲輪を見ることができる。

（註）予備調査では中世の青磁片や土師質土器小皿などが出土しており、当該期に全く利用がなかったわけではないようである。



- 1 永山城（丸山城・月隈城）・月隈横穴群 2 小追辻原遺跡 3 草場第2号遺跡 4 吹上遺跡
 5 慈眼山永興寺 6 大藏古城跡 7 慈眼山遺跡 8 大波羅遺跡 9 法恩寺山古墳群
 10 城下町（日田市豆田町伝統の建造物群保存地区） 11 史跡或宜園跡 12 城下町（隈の町並み）
 13 日隈城跡・日隈古墳 14 三郎丸砦跡・星隈横穴群 15 德瀬遺跡 16 隈山古墳 17 ガランドヤ古墳群
 18 六觀音古墳 19 上野第2号遺跡 20 上野第1号遺跡 21 永山布政所跡

【主要参考文献】

中島国夫 1974 「日田盆地のなりたち」『日田市30年史』 日田市／小柳和宏ほか編 2002～2004 『大分の中世城館』 大分県教育委員会／『日田三丘（日隈・月隈・星隈）の自然』1987 土郷日田の自然調査会
 『日田市史』1990 日田市／日田市および大分県教育委員会発行の各遺跡の発掘調査報告書等

第3図 周辺遺跡分布図 (1/30,000)



写真17 慈眼山と永興寺



写真18 慈眼山と慈眼山遺跡7次調査地(南から)



写真19 日隈城跡遠景(南から)



写真20 日隈城虎口石垣

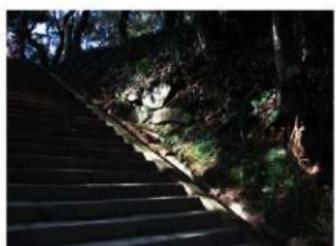


写真21 日隈城跡に残る石垣



写真22 日隈城本丸に残る石垣



写真23 星隈山(三郎丸砦跡)遠景(南東から)



写真24 三郎丸砦跡に残る曲輪

第1表 永山城関連年表

西暦	和号	できごと	支配
弥生時代以前		(丘陵上または周辺で、縄文土器や弥生土器が採集される)	-
6C末～7C前半	古墳時代後期	(丘陵の南面を中心に横穴墓が造営される(約50基+α))	-
～～～～～	～～～～～	～～～～～	～～～
1521～1548	大永元～天文17	大友姓田氏(日田親親)の終焉により8郡老(坂本・財津・羽野・石松・堤・高瀬・佐藤・瀬戸口)支配となる。	日田八郡老支配
1592	文禄元	朝鮮出兵(文禄の役)。日田郡東110名参加。	日田八郡老支配
1593	文禄2	・朝鮮での振舞いで大友氏が領地を召し上げられる。その結果、豊後国は太閤蔵入地となる。 ・文禄2年檢地の際に、因幡國鳥取の城主・宮部善洋坊印桂俊が日田・玖珠・国東・速見の代官として検地を行う。	太閤蔵入地
1594	文禄3	宮本長次郎が日田玖珠2郡の郡代となり、日隈城を築城。田島にあった町を城下に移し、隈町とする。	太閤蔵入地
1596	慶長元	毛利高政が隈藩主となり、日隈城に天守閣を築く。	隈藩(豊臣大名領)
1600	慶長5	岡ヶ原の戦いを受け、東軍方の黒田氏(中津城主如水)により日隈城が落ち、支配下に置かれる。	黒田氏所領
1601	慶長6	・小川喜光守光氏が丸山城(月隈城)を築く。丸山町(豆田町)成立し、以後小川代官。 ・毛利高政、佐伯藩に転封。(この際に日隈城は佐伯藩の代官所となる)	岡ヶ原の戦後処理により日田が3つに分割 ・小川姓代官支配地 ・毛利高政の佐伯藩領地 ・新設の岡藩支配地
1616	元和2	小川代官支配地・毛利氏支配地・速見郡を都石郡主・日隈頃忠(謫居大名)が治め、日隈主となる。丸山城を水山城と改める。丸山町を豆田町と改める。	日隈藩(徳川大名領)
1633	寛永10	石川氏転封となり。日田玖珠2郡のうち、旧毛利氏領地は井伊集落(永山城代)・旧小川代官支配地は中津藩(日隈城代)の領地となる。	日隈藩は3つに分割 ・井伊藩・中津藩預所 速見郡には松平氏
1639	寛永16	島原の乱を受け、幕府の地方支配機構強化のため大名領地から代官支配地への切り替え。二人代官、小川藤左衛門・小川九左衛門が着任。永山城前に布政所を設置。	2代官支配地 ・大分(高松)・宇佐も含め7万石支配
1644～1648	正保年間	この間の永山城の敷地 「豊後国古城跡并海路経」中に「義山古城」の記載あり。 「正保銅鏡」には永山城は施城となっている。	2代官支配地 ・大分(高松)・宇佐も含め7万石支配
1665	寛文5	日田騒動(百姓一揆)により代官改易。このため熊本藩の預り地となり、永山の古城番を置く。	熊本藩領地
1666	寛文6	・城の北に肥後鹿屋を買って備えを斎原にする(肥後ドンブ(水)リと呼ばれる自殺の名所)。 ・山代官(日田在紳)・内代官(高松在陣)支配	熊本藩預地 2代官支配 ・日田・高松でそれぞれ7万石を分配
1682	天和2	徳川綱吉の大名統廃により松平大和守源矩が永山城に居城する。 山上の城は不便であるため、山麓に城を築くも、館の完成を待たず山形に転封。 (松平の支配は1686(貞享3)年まで)	日隈藩(徳川大名領)
1686	貞享3	松平の転封により天守に復帰。永山城修の跡?に小川左近衛門が入り、代官所とした。	2代官支配
1688	元禄元	三田次郎代官より一人代官(日田・高松兼任)となる	1代官支配
1734	享保19	代官岡田太郎、陣屋前門に天満宮を勧請(大正年間に月隈神社に合祀)	1代官支配
1767	明和4	・田代代官が西国勝郡代(他に岡崎・美濃郡代)に昇進(後に飛騨が加わり全国4郡代)。その後、代々郡代支配地となり、長崎代官と共に徳川幕府の西国外様大名支配の最重要拠点となる。 ・代官所の公金は江戸・大阪・長崎へ回送する財務者(運行者)として掛家が発達し、代官所公金の管理運営を司るが故に、九州一円の大名に対する高利貸資本(日田金)が発展する。 ⇒以下明治政府まで	1代官支配 支配領域が拡大10万石を越える
1789	寛政元	紀後殿屋での死者の供養のため、「南無妙法蓮華經」と刻んだ供養塔を堀のほとりに建ててる。	
1793	寛政5	郡代羽倉權九郎、伏見堀荷大明神を勧請合祀。(代官専用の船荷社として、一般的の参拜はできなかったとのこと)	
1806	文化3	郡代羽倉權九郎、山道に鳥居設置。	
1818	文化15	代官塙谷大四郎、丹波山に金比羅の祠を建てたため、山の一部を切り開き、山道(永山道)修埋。この際、埋もれていた古墳時代の横穴墓が開口し人骨が出土したため、緋安碑(撰文:広瀬淡窓)を建てて供養。	
1868	明治元	寛田代官が陣屋から逃亡。 松方正義が初代日田県知事として赴任。	
1871	明治4	鹿児島県により、現林工の位置に日田県庁が、現広場の位置に県知事官舎が設置される。	
1881～1902	明治14～35	県知事官舎跡に日田区裁判所が設置される。	
1910	明治43	古蹟保存を目的として、城山部分を公園化。	
1915	大正4	公園として指定。(『豊後日田 永山布政史料』)	

III 調査の内容

(1) 調査の概要

発掘調査を行ったのは、第1図ルートBのうち、遊歩道を車道に改変する計画におけるスロープ（以下A区）と、月隈城跡・月隈横穴群発掘調査指導委員会の意見に基づいて工事計画を変更し、車道をやめて遊歩道を歩き易く改変する計画における石段・石壇部（以下B区）の2箇所である。A区では近代以降の大規模な整地層が、またB区では近現代に石段整備を行った痕跡が検出された。

なお、B区周辺で発掘調査の対象としなかった石段・石壇については、工事前の現況を実測し記録している。

(2) A区

A区は公園広場の北端、広場や歩道からは植え込みを介してやや離れた、丘陵裾部である。ここは崖ぎわにあたり、崖面はほぼ垂直またはオーバーハング気味となっていることから、本来の崖面（阿蘇溶結凝灰岩）をいつの頃にか掘削していることが予想されたため、その時期を判断することと、それがもし近世以前であれば、氷山城に関わる遺構が残っているか否か、の2点が主な調査項目となった。

調査は重機を用いて西側から表土を除去していく。調査区の中ほどまでは現地表から30cmほどの浅い位置で平らな凝灰岩の岩盤にあたり、そこに陶磁器や鉄製品、最近の石油製品などを埋土に含む溝や土坑などが掘りこまれていた。調査区の中ほどまでは岩盤までが徐々に深くなり、中央のベルトあたりで岩盤が急角度で落ちている。この落ちが本来の山肌の岩盤と思われ、この落ちから西側の部分は岩盤直上の土層中に建築合板やガラス板が含まれていたことから、戦後に掘削・整地が行われたものと思われる。

岩盤の落ちから東側は、最も深いところで現地表下約2.1mで岩盤が確認されており、それから上は全て整地層となっている。整地層中には人頭大の川原石とともに陶磁器類などの遺物が大量に含まれており、江戸期のものと思われるものもあるが、型紙刷りや銅版転写の染付などが多数見られることから、氷山城に直接関係するものとは考えられず、遡っても日田県庁と県知事公舎が建てられた明治時代初期以降、おそらくはその後の裁判所建設や公園として整備された際の整地が大部分を占める可能性が高い。調査区北側の崖面が掘削された時期については、この整地に伴う可能性が高いと思われるものの、明らかにすることはできなかった。



写真25 重機作業風景



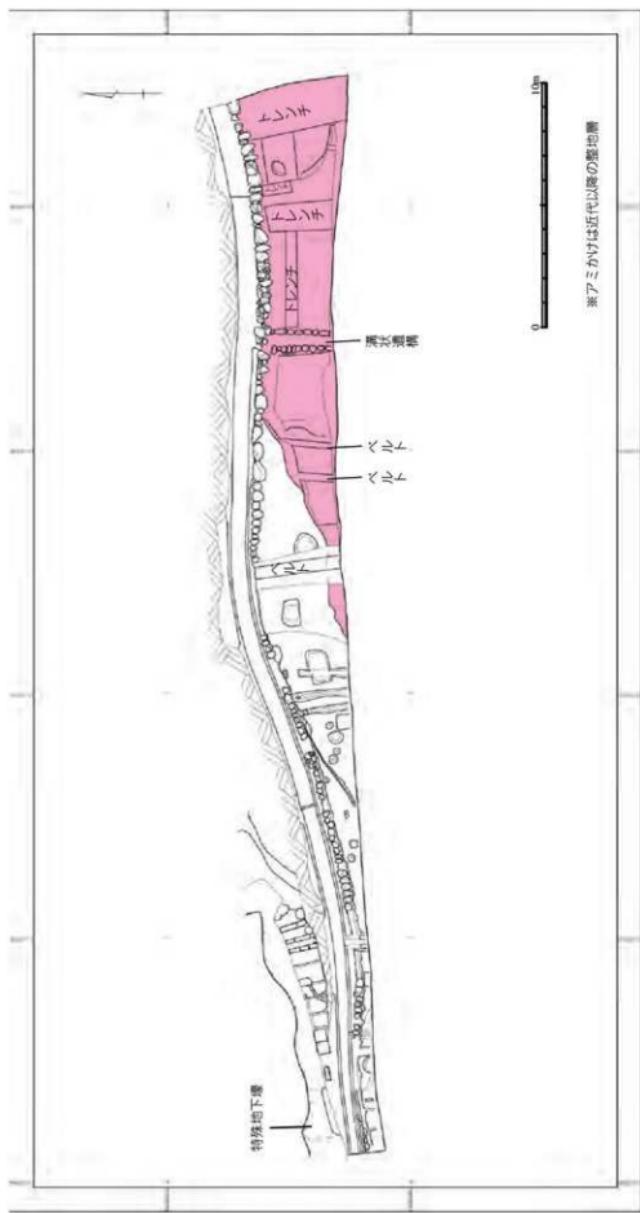
写真26 作業風景



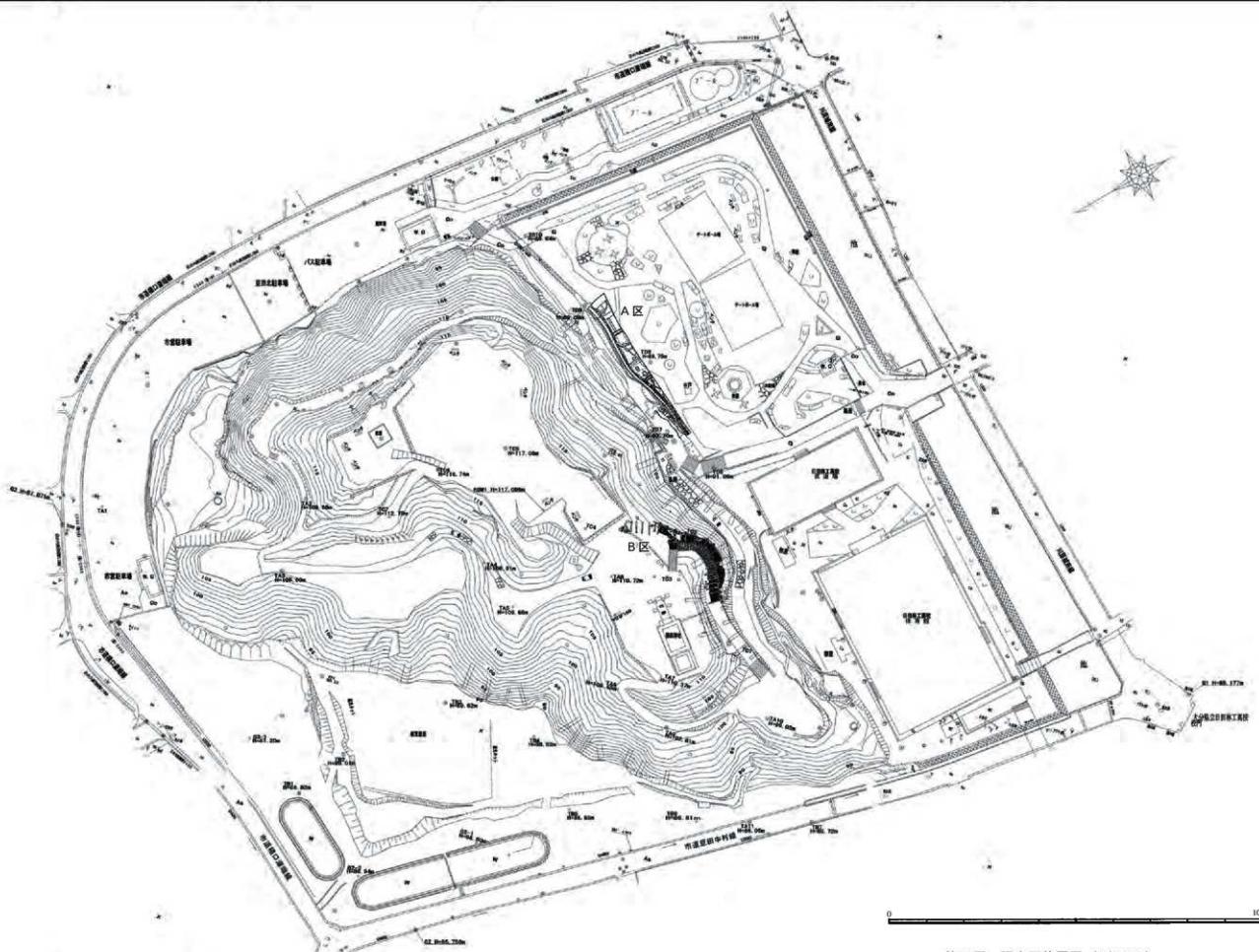
写真27 調査区中央ベルト土層



写真28 遺物出土状況



第4図 A区遺構配置図 (1/200)



第5図 調査区位置図 (1/1,000)

(3) B 区

A 区の調査後、各種保護団体との協議や発掘調査指導委員会を経て、車道の新設から現在の歩道を改修する工事へと計画が大幅に変更することとなり、発掘調査対象箇所も変わった。B 区は月隈山中腹、月隈神社のある平場から下りる石段・石疊の一郎で、本丸石垣（南側）の西麓である。この場所は予備調査では具体的に確認はされなかったものの、永山城の本来の城道が石段・石疊の下に残っている可能性があるため、その確認および石段が作られた時期の確認のため発掘調査を行ったものである。

調査は重機を搬入できないため、人力で行った。石段部については現在の歩行面がほぼそのまま地山（阿蘇凝灰岩）の露出面となっており、地山を階段状に掘削して段の石材を据えることで階段を成していることがわかった。表土が極めて薄いこと、地山が掘削されていることから、本来の城道の存在は確認できなかった。なお、階段西端の石材の下には部分的に浅い溝があり、この埋土中より昭和 16 年製造の「富士 1 銭アルミ貨」が 1 枚出土しており、現在の石段は戦時中以降につくられたものと思われる。そのほか特徴的な事象として、階段に使用されている石材は、表面的には隅を落した単純な角柱を呈していたが、その裏側には不規則な窪みが数多く施されていた（写真 30）。これについては、建物の土台の下端を礎石の凸凹に合せて加工した。石材の「ヒカリツケ」と思われる。同様の技法は、史跡威宣園跡に残る書蔵庫（1890 年築造）や豆田町の古い家屋の基礎石に見られ、玉石礎石の上に角柱状の石材を据える場合に、ずれを防ぐため玉石のカーブに合せて角柱石を削ったものである。実際にはこの階段に玉石は使用されずヒカリツケを行う必要がないため、これらの石材は永山城内または永山布政所や近隣の民家などの建物から流用したものと考えられる。

また、石段の中盤から下にかけて南側の地山が急角度で落ちており、そこを整地することで段の平坦面を確保している（第 7 図赤網かけ部）。整地層中にはほとんど遺物を含まないが、上面には角礫や玉石が大量に存在する。地山が落ちるあたりから東側に向かって、本丸石垣の南側に低い石垣が存在するが、石段の整地作業にあたりこの石垣を壊して埋めたもの可能性がある。またこの上層にはわずかな陶磁器片とともに、瓦当の文様から江戸時代後期（19 世紀前半～中頃）と考えられる瓦が含まれている。^{註①}

B 区の南西で記録保存を行った石疊はほとんどが挙大の川原石丸石を立てて並べて路面と成しているが、第 6 図に図示する中央の部分だけは他の部分と異なり、川原石を割った面を上にして敷き詰めている。丸石をそのまま利用した部分は昭和 30 年代に失業対策事業として工事を行ったともいわれているが、割り石の石疊は古い工法で、永山城の頃のものである可能性がある。^{註②}

なお、石疊の施工については工事立会を行い、遺構の有無の確認を行ったところ、第 6 図にある範囲では遺構は見られなかったが、折り返して下の段では一部石疊の下で、予備 3 次調査において確認されていた横穴墓の続きの痕跡が検出されている（写真 32）。今後何らかの工事を行う場合は、注意が必要である。

註① 田舎教育文化財保護課並み保存係 平塚英和氏のご教示による。少なくとも現在の月隈神社の底よりは古いとのこと。

註② 石田技術研究機構代表 高瀬耕朗氏のご教示による。



写真29 作業風景



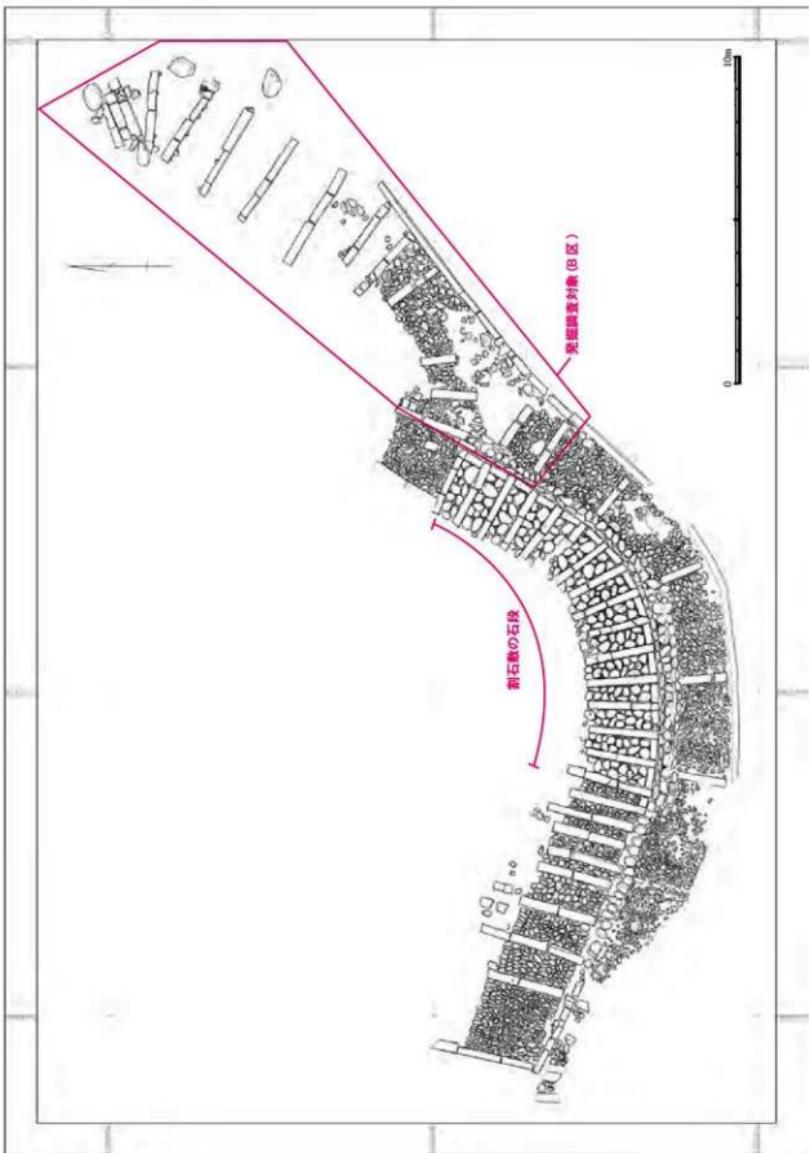
写真30 「ヒカリツケ」加工



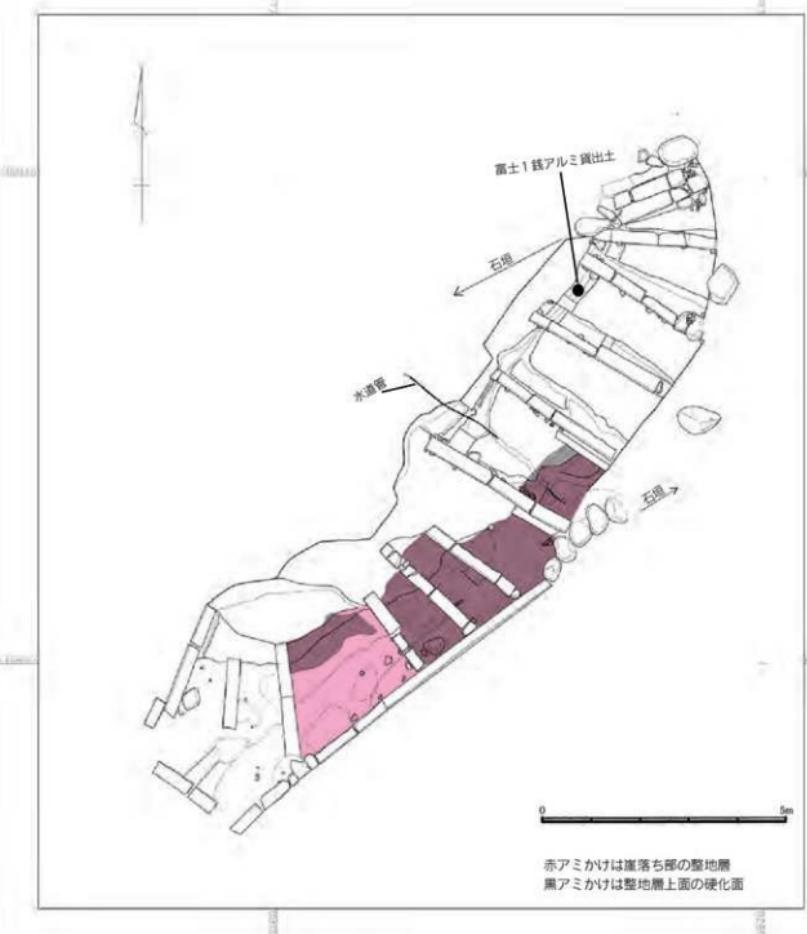
写真31 石疊施工状況



写真32 石疊下の横穴墓の痕跡



第6図 B区および石段実測図 (1/150)



第7図 B区遺構実測図 (1/100)

IV まとめ

(1) 今回の調査について

今回、公園の園路整備に伴い、文化財的には手付かずの状態であった月隈山の発掘調査を行った。A区では水山城あるいは明治期の日田県知事官舎の痕跡の検出が期待されたが、確認できたのは近代以降と思われる大規模な整地層であった。B区では本来の城道が石段・石疊の下に残っていることが期待されたが、戦時中以降の石段・石疊工事の痕跡と時期不明の整地層が認められたのみであった。もっとも園路整備にあたっては、予備調査等で見つかった城跡や横穴墓などの遺構への影響を最小限にとどめるような工法で施工することについて、工事主体者の協力を得られたことで、重要遺構を破壊せずに済んだと考えるべきかも知れない。

日田市は今、茨城県水戸市をはじめとする3市と協力し、永山城跡から約1km南にある史跡咸宜園跡を「近世日本の教育資産」として、世界遺産暫定リストへの登録を目指す活動を行っており、豆田町の伝建地区とともにこの永山城跡や永山布政所跡も構成資産として検討されている。永山城跡については、平成23年度より本格的な発掘調査等が予定されている。今後の調査が期待されるところである。

(2) 永山城のすがたと現況（第8・9図、写真33～56）

発掘調査では永山城の痕跡は見つかなかったが、20～21年度に実施した予備調査および現地踏査によって、城の遺構が明らかとなってきている。以下現段階で判明している各遺構について列挙する。

第9図①（写真33・34）は本丸である。現在はその一部に四阿があるのみであるが、その南の平場には平石が等間隔で点々と見られ、本丸御殿の礎石である可能性がある。

同②（写真35・36）は以前から知られていた本丸虎口南側の石垣である。隅はしっかりした算木積みであるが、川原石を基本とした平面構成となっている。所々に四角く加工された石が混在している。

同③（写真37・38）は②と対を成す石垣の存在を示唆する隅石と玉石の石垣である。現在は土に埋もれているが、本来はこちらにも石垣が存在したことを示す。

同④（写真39・40）は本丸の北側を廻る玉石の石垣である。やはり隅の部分には直方体の石が使用されている。

同⑤（写真41・42）は本丸の北にある、一段低い曲輪である。予備調査では土坑やピットが確認されており、建物が存在していたと思われる。

同⑥（写真43・44）は本丸西の、一段低い曲輪である。曲輪の南と北で石垣（時期不明）が確認されている。

同⑦（写真45・46）は月隈山北西部の平場である。現在は日田林工高校の実習用地として利用されているが、予備調査によりこの平場が城の一部として造成された堀曲輪であることがわかった。

同⑧（写真47・48）は堀の石垣である。現況でも点々と石の露出を見ることができるが、予備調査により石垣の存在が明らかとなっている。

同⑨（写真49・50）は⑧堀の石垣付近に残る土壘である。現況でも盛り上がりを認めるが、予備調査により土を盛って土壘としていたことが明らかとなった。

同⑩（写真51・52）は⑦堀曲輪を取り巻く堀の跡である。現在は埋め立てられて花壇や遊歩道として利用されている。現況では北側の幅が広く、寛文6(1666)年熊本藩預地であった頃に造り直されたという「肥後どんぼり」の名残をうかがうことができる。

同⑪（写真53・54）は⑦堀曲輪と⑤の曲輪を結ぶ縦堀である。予備調査で階段状に造成された痕跡が見つかっている。通路の途中には小さな石垣（隅石）も残っており、出入りの通路として利用されたものと思われる。

同⑫（写真55・56）は三の丸にあたる箇所で、現在は広場として利用されている。南側の堀外には永山布政所が存在したとされ、布政所との連絡通路もあり、また永山城の正面入口でもあった場所である。

写真33 ①本丸

奥に四阿の高まりが見える。



写真34 ①本丸

木々の間に礎石が点在する。



写真35 ②本丸虎口南側石垣

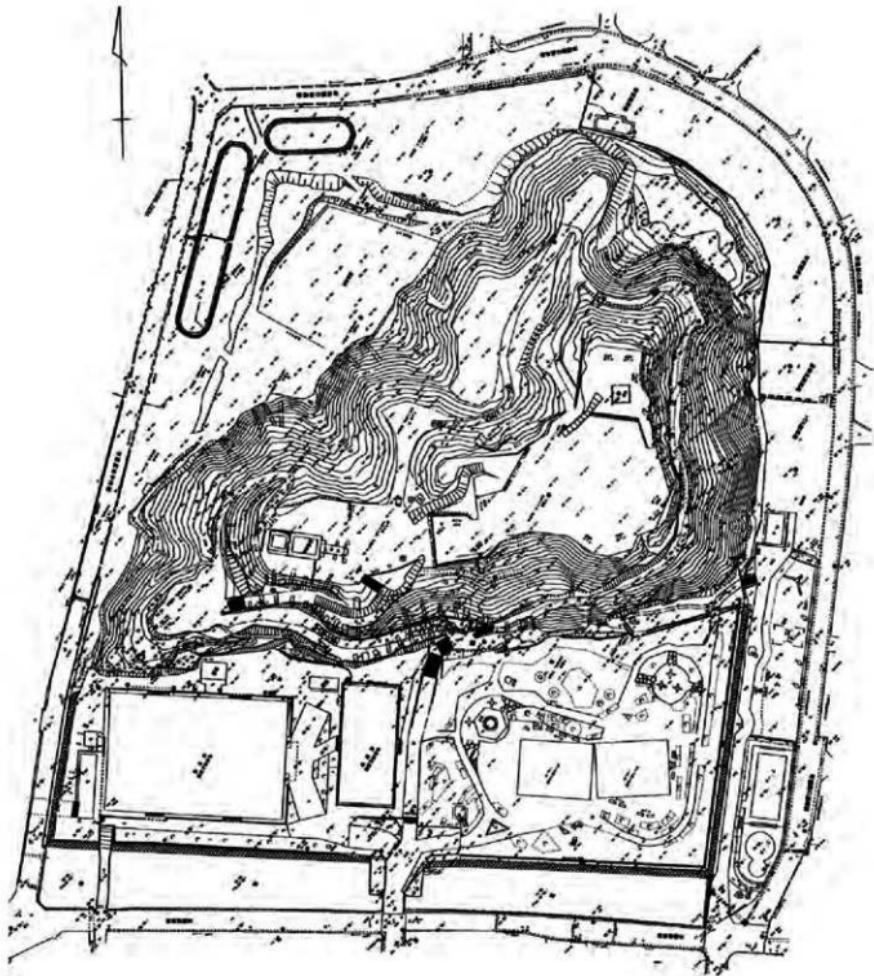
積み方の違いから、何度も積み直しが行われたようである。



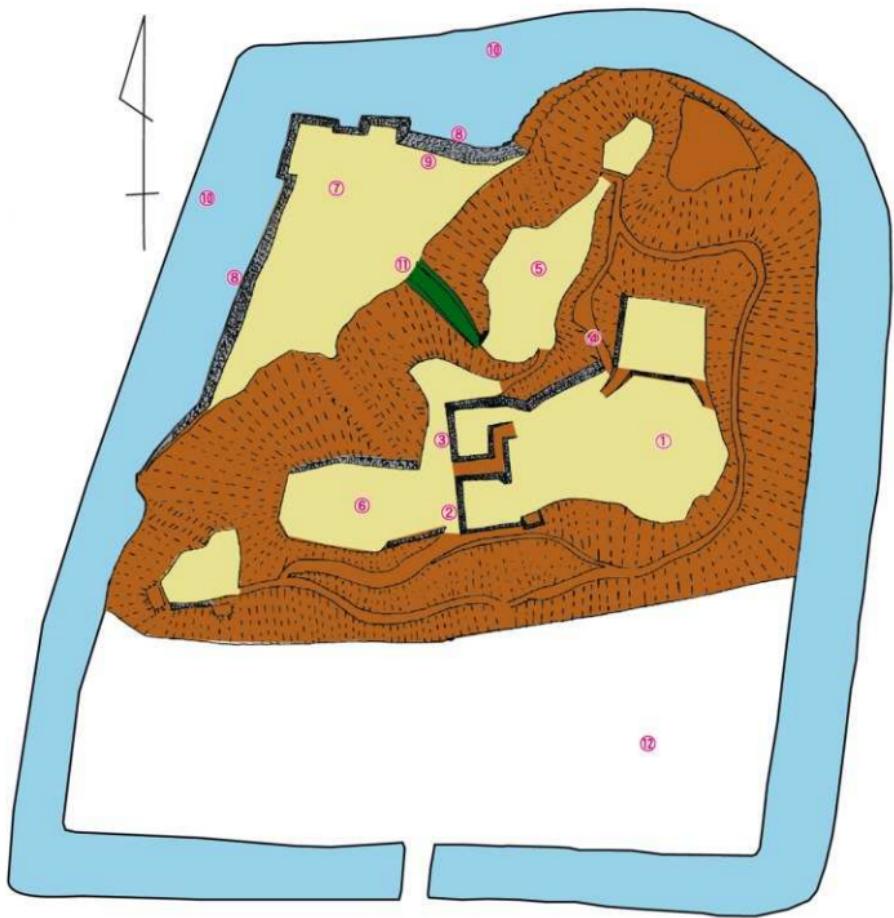
写真36 ②本丸虎口南側石垣

隅石には反りが見られず、直線的である。





第8図 永山城跡地形図（任意縮尺）



※平成 21 年 10 月 4 日の意見交換会資料に加重。
※丸数字は写真 35 ~ 56 に一致。

第9図 永山城縄張想定図



写真37 ③本丸虎口北側石垣

予備調査青1トレンチ。土に埋もれて、本来の石垣が見えなくなっていた。



写真38 ③本丸虎口北側石垣

予備調査青5トレンチ。隅石の面が奥に見える②の石垣と揃っており、対を成すと考えられる



写真39 ④本丸北側石垣

本丸から北(⑤の曲輪)への降り口。玉石積みの石垣がある。



写真40 ④本丸北側石垣

写真39を逆方向から見上げる。通路の両側に石垣がある。



写真41 ⑤本丸北側の曲輪

予備調査青9トレンチ。土坑やピットが検出され、建物の存在をうかがわせる。



写真42 ⑤本丸北側の曲輪

予備調査青8トレンチ。写真41の遺構は、2.4m以上もの厚さの灰土による整地層に掘りこまれていた。



写真43 ⑥本丸西側の曲輪

現在は月限神社が建っている。



写真44 ⑥本丸西側の曲輪

月限神社近景。画面外左と右に石垣が存在する。



写真45 ⑦堀曲輪

予備調査青 A トレンチ付近。



写真46 ⑦堀曲輪

予備調査青 J トレンチ土層。本来の曲輪の高さは写真右端の岩盤面と考えられる。



写真47 ⑧堀の石垣

予備調査青 J トレンチ付近。雑草と薄い表土を剥ぐと、石垣が残っている。



写真48 ⑧堀の石垣

予備調査青 C トレンチ。現在は土に埋まっているが、斜面には石垣が残っている。



写真49 ⑨土壘

予備調査青しトレーニチ付近。平場端部に土の盛り上がりが視認できる。



写真50 ⑨土壘

予備調査青しトレーニチ土層。
かまぼこ状の黄褐色土層の高まりが
見える。



写真51 ⑩堀

西側の堀を北からのぞむ。現在は埋
め立てられて花壇などとして利用され
ている。



写真52 ⑩堀

北側の堀を東からのぞむ。このあたりがもっとも幅広く、「肥後どんばり」
を想像させる。



写真53 ⑪豎堀

予備調査青日トレンチ。岩盤を大きな階段状に削りだしている。



写真54 ⑫豎堀

Hトレンチを上から。階段状の平場の端には水切り溝が掘られている。



写真55 ⑬南側堀曲輪

永山城南側の堀と石垣。石垣右側(内側)が南側堀曲輪。堀の左側(外側)に永山布政所があったとされる。



写真56 ⑭南側堀曲輪

現在は祭の際の催し物広場やグラウンドゴルフなどに利用されている。



A区 調査前 (東から)



A区 全景 (西から)



A区 掘下げ状況 (西半)



A区 掘下げ状況 (東半)



A区 遺物出土状況



A区 東半整地層除去後



A区 出土遺物



A区 出土遺物

写真図版 2



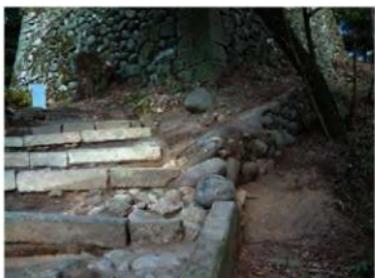
B区 調査前（北東から）



B区 調査前（南西から）



B区 石段表土除去状況



B区 本丸石垣南の石垣検出状況



B区 整地層掘下げ状況



B区 整地層掘下げ状況



B区 出土遺物（昭和16年富士1銭アルミ貨）



B区 出土遺物（軒平瓦）

報 告 書 抄 錄

ふりがな	ながやまじょうあと
書名	永山城跡
副書名	—
シリーズ名	日田市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第99集
編著者名	行時 桂子
編集機関	日田市教育文化財保護課
所在地	〒877-0077 日田市南友田町516-1
発行年月日	2011年3月25日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
永山城跡	大分県日田市丸山 2丁目2-1ほか	44204-6	204110	33° 19' 56"	130° 56' 9"	20100517 ～ 20110315 (工事立会 含む)	243m ²	記録保存 調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
永山城跡	城館	近世	近代以降の整地層 戦時中以降の石段	陶磁器 染付 焜炉 鉄製品 錢貨 など	調査区内では、永山城に 関わる遺構は検出できな かった。

要 約	<p>永山城跡（丸山城・月隈城）は、日田盆地の北寄り、そばを流れる花月川の侵食作用によってできた、阿蘇溶結凝灰岩の独立丘陵である。古くから市有地となり公園として利用されてきたため、城跡や遺跡として認識されながらも、これまで発掘調査の対象となることがなかった。</p> <p>今回の調査では、園路整備により現在の地形を描う2箇所（A・B区）について発掘調査を行った。A区は南側堀曲輪の最奥部で丘陵崖面そばにあたる。南側堀曲輪には廃藩置県により日田県知事の官舎が建てられたとの記録があり、その痕跡または永山城の曲輪としての痕跡が見つかることが期待されたが、明治期以降の造成による整地層が確認されたのみであった。整地層からは陶磁器類や土製品・鉄製品などが大量に出土した。</p> <p>B区は本丸石垣の西側麓にあたり、本来の城道が見つかることが期待されたが、現代（戦時中以降）の石段・石疊造成時に大きく削平を受けていることがわかった。</p> <p>今回の調査では永山城に関わる遺構は確認できなかつたが、来年度以降本格的な調査が行われる予定である。永山城や永山城の堀外につくられたといわれる永山布政所、廃藩置県後の日田県知事官舎など、近世～近代の様相の解明が待たれる。</p>
-----	---

永山城跡
2011年3月25日

編 集 日田市教育庁 文化財保護課
877-0077 大分県日田市南友田町516-1
発 行 日田市教育委員会
877-8601 大分県日田市田島2丁目6-1
印 刷 山本印刷有限会社
877-0059 大分県日田市大日町3986-3



日 田 市